

郷土博物館だより [つはく]

津博

TSUHAKE

2019. 7 No.101

トピックス

- ・ 第 118 回文化財めぐり
- ・ 図書館を使った調べる学習コンクール

お知らせ

- ・ 友の会会員募集中です
- ・ 当館へお越しの際の駐車場について

耐震改修工事の進捗状況

資料紹介

- ・ 旧津山市庁舎カラー写真 小島 徹

研究ノート

- ・ 正徳の新御殿 東 万里子



津山郷土博物館

Tsuyama City Museum

第118回文化財めぐり

5月25日第118回文化財めぐりを開催しました。今回は「大崎周辺を歩く」と題して、中原や金井、福力などにある神社や石碑などの文化財をめぐりました。

今回は5月にしては、とても暑い30度を超える日でしたが、参加者のみなさんは汗をかきながらも熱心に見学をされていました。



図書館を使った調べる学習コンクール

7月6日に、津山市立図書館主催の「図書館を使った調べる学習コンクール」チャレンジセミナー②「津山の城下町を調べてみよう」が開催され、子供たちに城下町について解説をしました。現在当館は耐震改修工事のため、会場は津山市立図書館で行いました。

当日は7名の子供たちと保護者の方々が参加し、熱心に話を聞き入っていました。



友の会会員募集中です

現在当館は耐震改修工事で休館中ですが、本年度も友の会の会員を募集しています。現在博物館の展示をご覧いただけなかったため、会費は年額500円とさせていただきます。

会員特典は当館発行のたより「津博」や当館主催の文化財めぐりのご案内の送付などとなっております。

みなさまふるってお申し込みください。

友の会会員証

平成31年度



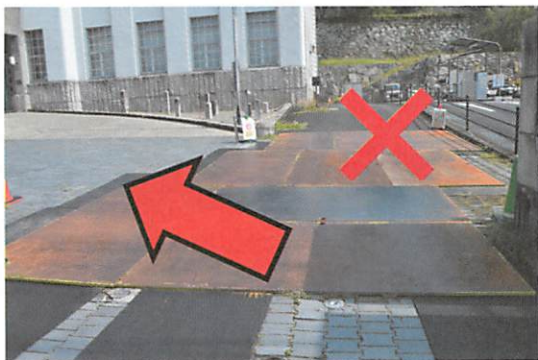
様

津山郷土博物館

当館へお越しの際の駐車場について

現在、当館は耐震改修工事のため、建物裏の駐車場をご利用できません。ご利用の方は、西隣りの観光駐車場か、建物正面の南側をご利用ください。

なお、建物南側をご利用の場合は、工事時期により、駐車場所が異なりますので、あらかじめお尋ねください。



建物裏は進入できません。



南側の建物表側へお願いします。

耐震改修工事の進捗状況

耐震改修工事は、現在3階を工事中です。展示室の壁を崩して、耐震補強用の山形の鉄骨を入れる作業を行っています。また、3階中央展示室の天井付近にある、現在使っていない窓について、窓のままだと強度が足りないため、コンクリートで埋めています。見た目は今までどおり窓があるような仕上げをする予定です。

今後、3階終了後は、順次2階、1階へと進んでいきます。



3階東側の展示室



補強用の鉄骨が入っています



天井付近の窓を塞ぎます
(赤丸で囲んだ箇所)

旧津山市庁舎カラー写真



旧津山市庁舎カラー写真（昭和40年代頃か）

小島 徹

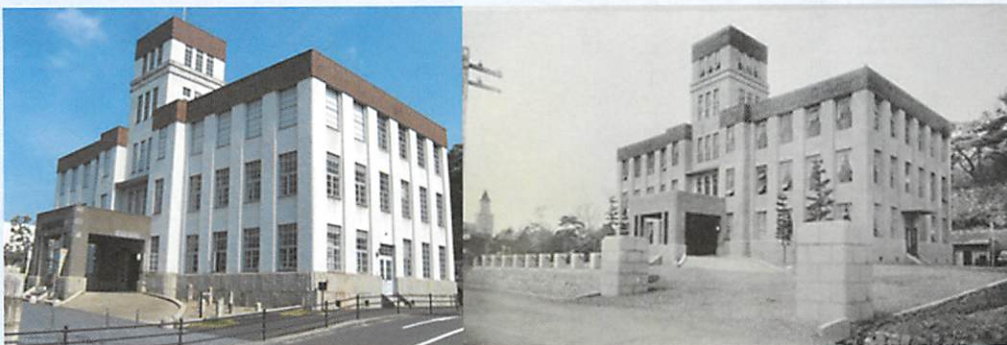
この写真は、元津山市職員のご故・尾宮才助氏のご親族から当館へ最近寄贈されたものです。尾宮氏が在職中に撮影し、引き伸ばして額に入れてありました。裏書などが無く、撮影時期がはっきりしませんが、およそ昭和40年代頃の撮影と思われる。

庁舎の外観に注目すると、外壁が全て白く、郷土博物館に改装された現状と比較すると、茶色の帯状のタイル貼りが見られません。しかし、竣工当初の古写真を見ると、現状と同様の帯状のデザインを確認できます。戦時中に空襲の目標となるのを避けるため、黒くススが塗られましたが、昭和37年（1962）に薄桃色に塗り替えられた際、元の帯部分も全て同色に塗られたようです。

庁舎の周辺を見渡すと、西隣には別棟の食堂があり、東隣には昭和33年竣工の庁舎新館（後に図書館として利用）の建物が見えます。正面玄関前は駐車場ですが、細長い土地で10数台しか駐められません。車での

来庁者が増えていたであろうこの時期、駐車場確保の問題も深刻化していたと想像されます。

登録文化財の旧市庁舎が現役として活躍中の様子をカラー撮影した貴重な1枚です。



現在の郷土博物館の外観（左）と竣工当初の市庁舎の外観

正徳の新御殿

東 万里子

つづく地震

宝永四年（一七〇七）十月四日、遠州灘から四国までの沖合を震源として巨大地震が発生しました。この地震は南海トラフ地震と考えられています⁽¹⁾。

地震が発生した十月四日の津山藩国元日記には、「いままで覚えがないほどの強い地震」であったことが記されています。その後も地震はつづきました（以下特に注記がないものはすべて国元日記による）。宝

永七年閏八月十一日の地震では潰家や山崩れがあり、死人が出る被害が出たとありますが、詳細は分かりません。翌年の二月一日に発生した地震については、被害の概要が記されています。それによると、被害が大きかった地域は大庭郡・真鳥郡と考えられ、百十八軒が「潰家」、百四十一軒が「半潰家」、山崩れが七十ヶ所あったことなどが分かります。

このような状況のなか、正徳元年（一七一）五月、津山藩は新御殿建設に動き出しました。二十一日、江戸留守居役が老中

井上河内守へ「津山御本丸の外内山下御住居御家作の義御伺い書」を提出します（江戸日記）。二十二日には許可が下され、六月十日に国元へ伝えられました。国元日記には、「津山では近頃地震が度々起こり、御城内には石垣が多く余っている土地もなく、地震のときに退所がないので、平地に軽家をつくり、住居として使いたい」と記されています。

新御殿の位置

元禄十六年（一七〇三）頃から宝永四年頃の間の状況が描かれていると考えられる②写真①「津山古図」（矢吹家資料 弓齋叢書269）③と写真②の享保七年（一七二二）「津山御城下惣絵図」を見ると、写真①の大熊六左衛門・将監の屋敷と御用場の部分が写真②では御殿になっているのがわかります。

正徳元年六月十一日、内山下に「御殿御家作」が仰せつけられます。それと同時に、大熊将監の居屋敷と安藤主殿の居屋敷東の方三間通が御用につき召し上げられました。

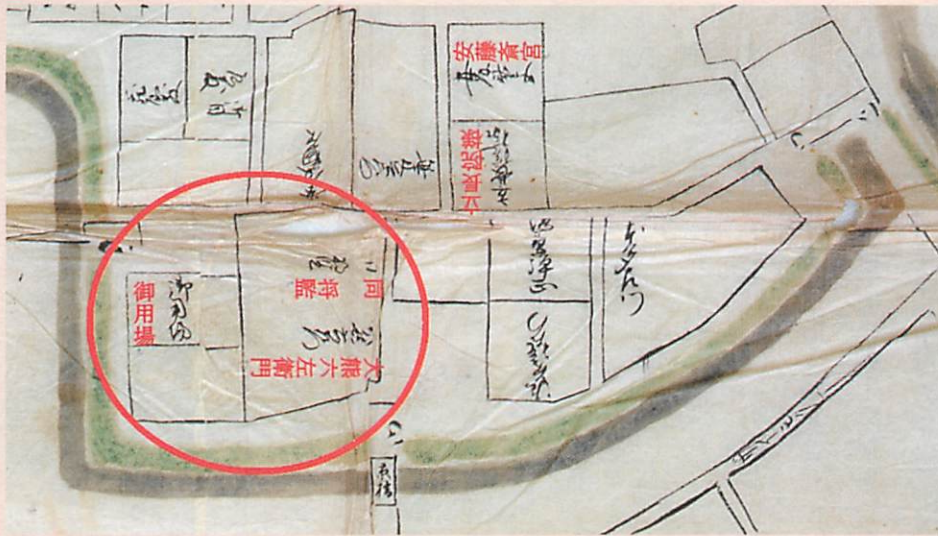
写真①の時点では、安藤斎宮（主殿）の屋敷は現在観光センターがある辺りになっていますが、宝永五年六月十九日に御用場の場所へ移っていました。写真①の御用場があった場所（正徳元年の時点では安藤の屋敷）を写真②の御殿と比較すると、御用場の東側が御殿に取り込まれていることがわかります。

新御殿建設の経過

正徳元年九月二十二日に新御殿造作につき祈祷が行われ、翌年五月九日に完成しました。さっそく十二日には生後十一ヶ月の姫様（万）が新御殿に移りました。翌日に御用場始が行われ、十五日からは御家老年寄をはじめとして日参役人も新御殿へ出仕するようになります。十八日には藩主宣富が帰国、その日の内に新御殿へ移り、姫様と初めて対面しました。

新御殿の機能

新御殿は宣富など藩主一族の住居として機能していたようです。正徳三年三月、宣富が江戸へ出立する時は、新御殿から出発



写真①「津山古図」

していますし、翌年の五月に帰国した際は、新御殿に入っています。毎月朔日や節句などのときには、その都度「御城江被為入」や「御本丸江被為入」などと記述があり、登城していたことがわかります(4)。その他にも、御用場があったことから、評議の場などとしても使われていたと考えられます。



写真②「津山御城下惣絵図」 赤い点線は写真①の時の屋敷割り

新御殿には御城の本丸御殿と同様に御座之間がありました(5)。正徳二年五月二十七日に「一更山様(綱国)四時過入らせられ御座之間において御対顔…」とあり、綱国が宣富と御座之間において対面したと書かれています。このときの御座之間は御城と新御殿のどちらでしょうか。同日記事に「一

(更山様は)御殿初て御入遊ばされ候…」とあることから、この御座之間は新御殿の御座之間であると考えられます。この時期の国元日記を読むとき、「御座之間」がどちらの御座之間なのか、前後の文脈に注意する必要があります。

新御殿のその後

宣富が享保六年二月に亡くなってから寛保二年(一七四二)に長孝が帰国するまでの約二十年間、国元津山では藩主不在が続きました。この間に、新御殿も変化していきます。元文二年(一七三七)閏十一月十九日に姫様が江戸へ出立した後、御殿の表門が締め切られました。その後も少しの間は申し渡しの場などとして用いられたようです。

延享元年(一七四四)七月二十四日には「是迄新御殿跡にあり候鎮守稻荷宮大円寺へくだされ」とあり、同年八月十八日には「御殿跡にあり候稻荷神体大円寺地内小社へ移し」とあることから、この時点で新御殿はなくなっていること、「新御殿」の名称から「新」を取り、「御殿」とのみ呼ばれることがあったことがわかります(6)。

おわりに

正徳二年に完成した新御殿について、国元日記の記述をまとめました。藩主がどこで生活していたのか、評議の場はどこであったのかを考えると、本丸御殿だけではなく、内山下などにあった建物についても視野にいれる必要があると思われます。

新御殿がなくなった後、正徳の新御殿ほどの規模ではないものの、内山下周辺には評議の場や藩主の子供達の居所ができたと考えられます。下御屋敷については、乾貴子氏が「津山城三の丸」下御屋敷について」で詳しく述べられています。

寛保二年四月十三日には「明日より下御用場相止め御城所々役所へ道具遣わす」とあり、御城以外の場所に御用場があったことがわかります。また、宝暦六年（一七五六）十一月一日には「内山下下村小膳揚げ屋敷御用場に相成り」とあります。御用場などの変遷については今後の課題です。

註

(1) 内閣府「1707宝永地震報告書」（平成二六年三月）内閣府ホームページ上で閲覧。

(2) 大熊がこの場所（小須賀の上げ屋敷）に入ってくるのが元禄十六年十月（勤書）で、立長院（綱国の義母）が亡くなるのが宝永四年八月（津山温知会誌）であるため。


(3) 尾島治「居住者の変遷」（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第61集、永見屋敷跡）津山市教育委員会 平成九年三月）参照。

(4) 「国元日記」享保三年五月十三日には、「今朝御登城懸御殿槍之間ニ而左之通御通縣御目見被仰付」とあり、登城前に新御殿にいたことがわかります。

(5) 「国元日記」正徳二年五月五日に「御城着之節御城御座之間砂の物新御殿御座之間ニ立花」とあり、御城、新御殿両方に御座の間があることがわかります。

(6) 「国元日記」正徳二年五月九日に「来ル十三日今新御殿御用場始」とあり、同月十三日には「御殿御用所江出席」とあることから、新御殿が出来てすぐの時期から新御殿の新がとれて御殿と呼ばれることがあったと考えられます。御用所と御用場の違いについては今後の課題です。

(7) 乾貴子「津山城三の丸」下御屋敷」について」（「年報津山弥生の里第26号（平成29年度）」）

 博物館だより「つはく」
No.101 令和元年7月1日



〔編集・発行〕 津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
Tel (0868) 22-4567 Fax (0868) 23-9874
E-mail tsu-haku@tv.tn.ne.jp

〔印刷〕 有限会社 二葉印刷


休館中のご案内

〔資料閲覧〕

閲覧可能日：月曜日～金曜日（要予約）
（祝日・年末年始は除く）の午前9時～午後5時

〔頒布資料について〕

当館発行の頒布資料につきましては、原則郵便にて受け付けます。詳細はお問合せください。

 は、津山松平藩の槍印で剣大といひ、現在津山市の市章となっています。